



Title	日本語複合語のアクセント付与規則
Author(s)	山下, 好孝
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 9, 79-90
Issue Date	2005-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/45656
Type	bulletin (article)
File Information	BISC009_005.pdf



[Instructions for use](#)

日本語複合語のアクセント付与規則

Accent rules on Japanese compound words

山下好孝

[Abstract] : In this brief report, I will present three rules that decide where the accent falls in Japanese compound words. First I will distinguish three types of compound word depending on how many moras the second part of the word includes.: Those that have more than five moras in their second part, those that have three or four moras, and those that have one or two moras.

These rules are useful for foreign learners in mastering the Japanese accent. Finally I insist on introducing accent exercises in Japanese teaching.

1. はじめに

筆者が日本語教育に携わっている北海道大学留学生センターで、中～上級レベルになっても自然な日本語がマスターできていない学生が多数存在する。長い期間、日本語を学習してきても、流暢さが感じられないのである。その多くの場合、日本語を発音する際のアクセントに問題がある。

国際交流基金日本語国際センターの磯村 一弘氏は、海外における日本語アクセント教育の現状について次のように報告している。

これまでの海外における日本語教育では、アクセントの教育が十分であったとは言い難い。そのため、習う側のモチベーションは高いにもかかわらず学習者としてその教育を十分に受けることができず、よって教師になってからも自分で必要性は感じていても教えることができない、という悪循環に陥っている。これはアクセントのことをきちんと教えなかったり、教材にアクセントを付してこなかった我々教師の責任が大きいのと思われる。

<http://www.isomura.org/myself/resume/2001/2001.html>

確かにアクセントについてきちんと教えなければいけないのだが、学習者から日本語のアクセントは複雑で難しいとの声をよく聞く。アクセントに関する考え方そのものも研究者によって異なる場合が多い。

日本語のアクセントというとき、各単語に特有のアクセントの型を指すことがある。その考え方に基づくと、各単語は「平板、頭高、中高、尾高」といった型に分類される。そして n 拍の単語には $n + 1$ の型の違いが認められるとする。これを「アクセント型」と呼ぶ。

もう一つの考え方はピッチの急激な下降に注目する考え方である。そのようなピッチの下降が始まる拍に「アクセント核」があると考え、そのような下降が認められない単語には「アクセント核」がないとする。

本研究ノートでは後者の考え方に基づき論をすすめて、アクセント核を「 \uparrow 」という記号で表記する。ただし、前者の「アクセント型」の概念も適宜利用することとする。

2. 複合語

アクセントの概念が把握できた学習者でも、単語ごとにアクセント核を覚えなければならないのかと不平も漏らすものもいる。また方言によってアクセント核の位置が異なることもあり、それだけでアクセントを勉強する意欲をなくしてしまうこともある。

しかし中級レベルである程度語彙力のある学生には、複合語アクセント規則を教えることが可能である。規則を覚えれば他の場合にも応用がきく。

ここで複合語は二つ以上の単語が結びついた語という緩やかな定義にしておく。厳密に言えば、ある単語に接辞などが付いたりしてできた語は派生語に分類される。しかし、連結する後部要素が「語」なのか「接辞」なのか不明瞭である場合が多い。

たとえば「中国的」は「中国」に接尾辞「的」がついて形容動詞になった派生語である。しかし「中国式」はどうであろうか。「式」にはたしかに辞書の見出しになっており、「ある物事をするときの一定のやり方」といった定義がどの国語辞書にも出ている。しかし後部要素の「式」を単独の名詞として使うことはまずない。後に見るように、複合語の中で後部要素が名詞であろうが、接辞であろうが、アクセントの付与においては同じような特徴を見せる。

本研究ノートでは厳密な意味での派生語と合成語をあえて区別せずに、

二つの要素からなる語を複合語として、そのアクセント規則を考えることとする。

3. 複合語アクセント規則

複合語のアクセント規則を考えるには、後部要素の拍数に注目する。

- 1) 5拍以上
- 2) 3～4拍
- 3) 1～2拍

そしてそのおのおののケースで複合語アクセント規則を設定することとする。

3.1 後部要素が5拍以上の語からなる複合語の場合

前部要素は平板化し、後部要素の元のアクセント核が保持される、

複合語を形成すると、前部要素にはアクセント核が現れず平板化し、後部要素のアクセント型は保持される

留学生 + 協議会 → 留学生協議会
りゅうがくせい きょうぎかい りゅうがくせいきょうぎかい

南 + カリフォルニア → 南カリフォルニア
みなみ かりふおるにあ みなみかりふおるにあ

例外的なもととして

メチル + アルコール → メチルアルコール
めちる あるこーる めちるあるこーる 又は
めちるあーるこーる

がある。単純語としての「アルコール」にはアクセント核はない。しかし

複合語になったときに第一拍にアクセント核が生じる場合がある。この場合「アルコール」は「アルコル」のように4拍で発音されて、次のセクションで見る「後部要素3～4拍」のアクセント規則が適用されているのではないかと思われる。

しかし、一見すると複合語に見えるが、前部要素のアクセントが保持され、完全な複合語とは言えない例もある。

南部 + カリフォルニア → 南部カリフォルニア
なㇿんぶ かりふおるにあ なㇿんぶかりふおるにあ

この場合、前部要素の「南部」が接頭辞的に使われ、対比的な意味合いを持つからであると考えられる。こういったものは完全に複合語として一体化しておらず疑似複合語と呼ぶことにする。疑似複合語の例として次のようなものもある。

前 + コーディネーター → 前コーディネーター
ぜㇿん こーでいねㇿーたー ぜㇿんこーでいねㇿーたー

また後部要素が役職名の場合も、完全な複合語とは言えない。

小泉 + 総理大臣 → 小泉総理大臣
こいㇿずみ そうりだㇿいじん こいㇿずみそうりだㇿいじん

役職名はかなり独立性がつよい要素であると考えられる。そのため、人名の後につくこともあれば前につくこともある。

島 耕作 + 課長代理 → 島耕作課長代理
しㇿまこうさく かちょうだㇿいり しㇿまこうさくかちょうだㇿいり
課長代理 + 島 耕作 → 課長代理島耕作
かちょうだㇿいり しㇿまこうさく かちょうだㇿいりしㇿまこうさく

よって役職名が後部要素になる複合語は疑似複合語となり、複合語アクセント付与規則からはずれることになる。

後部要素が5拍以上になると、意味的には複合語になっても、後部要素はある程度独立して発音される。これは後部要素が長いために、音韻的に独立するためだと考えられる。つぎに後部要素が3～4拍のものに移る。

3.2 後部要素が3～4拍の語からなる複合語の場合

前部要素は平板化し、後部要素の第一拍にアクセントの核を置く

日本語の複合語はこのパターンのものが多い。

危機 + 管理 → 危機管理
きㄗき かㄗ んり ききかㄗ んり

早稲田 + 大学 → 早稲田大学
わㄗ せだ だいがく わせだだㄗ いがく

筆者が教えた経験では、このルールは特に中国の学生に役立つ。中国では単純語のアクセントについては教科書や辞書に記載が見られる。ところが中国人学習者の多くは、単純語のアクセントを複合語でも保持する傾向にある。これは母語である中国語の影響であると考えられる。誤ったアクセント形式を「*」で示す。

北京 + 大学 → 北京大学
べㄗ きん だいがく * べㄗ きん だいがく

澄川 + 中学 → 澄川中学
すみㄗ かわ ちゅㄗ うがく * すみㄗ かわちゅㄗ うがく

後部要素が3～4拍の語からなる複合語では、上に示したルールからはずれるものがいくつかある。まず語構成にその原因を求められるものを考察する

基礎 + 英語 → 基礎英語
きつそ えいご きそえついご

基礎 + タイ語 → 基礎タイ語
きつそ たいご * きそたついご
きつそたいご

「基礎英語」のほうは複合語アクセント規則に合致しているのにたいし、「基礎タイ語」のほうはそのルールに従っていない。そこで後部要素の「英語」と「タイ語」を比べてみることにする。

「タイ語」の方は、「タイ+語」というふうにくれ自体複合語と見なすことが出来る。しかし「英語の」のほうは「英+語」という複合語というより「英語」という単純語であると考えの方が自然なのではないだろうか。よって「基礎タイ語」は2語からなる複合語ではなく

基礎 + タイ + 語

という3語からなる複合と解釈される。3個以上の語からなる複合語の場合、後ろから2個ずつの語がまとまる傾向がある。

府立 + 医大 + 病院 + 前 (京都のあるバス停名)
ふつりつ いだい びょういん まえ

府立医大病院前 ふりついつだいいょういんまえ
又は
ふつりつ いだいいょういんまえ

以上のことを考えると、後部要素に複合語が来る場合、上記の規則に従わないこともあると考えられる。

原始 + マニ教 → 原始マニ教
げつんし まにきょう げつんしまにきょう (cf. 原始仏教)

日産 + 自動車 → 日産自動車
にっさん じどうしゃ にっさんじどうしゃ
じどうしゃ

プロペラ + 飛行機 → プロペラ飛行機
ぷろぺら ひこうき ぷろぺらひこうき

つまり後部要素が複合語と感じられる場合は、そのアクセント形式が保持されるということである。このことは後部要素が「接頭辞+語」という複合語の場合にも当てはまる。

関西 + おでん → 関西おでん
かんさい おでん かんさいおでん

紙 + おむつ → 紙おむつ
かみ おむつ かみおむつ

つぎに音韻的な理由で上記のルールからはずれるものが考えられる。これは窪園・山本(1999:73)に指摘されている後部が3・4拍の複合語で、

- a. 後部の前の方に核があるとき(後部=頭高型・中高型)
→ 後部のアクセント核を残す。
- b. 核が後部の語末にあるとき、または核がないとき(後部=尾高型・平板型)
→ 後部の1拍目にアクセント核を置く。
- c. 核が後部の語末から2拍目にあるとき
→ 後部の1拍目に核が生じる場合もある。

という記述のa、cに対応するものである。

急 + ブレーキ → 急ブレーキ
きゅう ぶれいき きゅうぶれいき (規則a. が適用)

アイス + コーヒー → アイスコーヒー
あゝいす こーひー → あいすこーひー
又は
あいすこーひー (規則 c. が適用)

しかしながら上記の規則 c は「長音」が関与していない場合には、あまり問題にならないようである。つまり核が後部の語末から 2 拍目にあるときでも、その拍が長音でなければこの節で最初に述べた規則が適用され、後部要素の第一拍にアクセント核が置かれるということである。

温泉 + 卵 → 温泉卵
おんせん たまご → おんせんたご

悪 + 条件 → 悪条件
あく じょうけん → あくじょうけん

後部要素の語末から 2 拍目に核があり、そこに長音がある場合にはアクセント核は保持されることが多い。上記の「アイスコーヒー」の場合以外に次のような例がある。

宗教 + タブー → 宗教タブー
しゅうきょう たぶー → しゅうきょうたぶー

すると音韻的な例外として考慮すべきは窪園・山本 (1999) で述べられた上記の規則 a. だけだということになる。

ブラジル + ウグイス → ブラジルウグイス
ぶらじる うぐいす → ぶらじるうぐいす

アイス + クリーム → アイスクリーム
あゝいす くりーむ → あいすくりーむ

10年 + 家計簿 → 10年家計簿
じゅうねん かけりば じゅうねんかけりば (cf. 学生名簿)

ただし、後部要素の元の意味が希薄になった場合には、上記の規則 a. からははずれ、一般規則に従う。

青 + 紫 → 青紫
あお むらさき あおむらさき

江戸 + むらさき → 江戸むらさき (桃屋の製品)
えど むらさき えどむらさき

さらに一見すると複合語だが、音韻的には複合語を形成しない疑似複合語も存在する。

生理学的仕組み	日本のふるさとことば集成
基本的道筋	地方独特
喉頭全体	三者凡退
音響的特徴	新旧交代
後部歯茎	商法違反
硬口蓋歯茎	英語話者同然
曲線全体	日本沿岸
音声研究入門	日本近海

これらの疑似複合語では前部要素のアクセントが保持されている。さらに後部要素も単純語の場合のときと同じように発音され、独立性を保っている。これらは複合語を形成しているというより、形容動詞の語尾や助詞などが省略された表現、つまり句とみなしたほうがよいのであろう。

生理学的な仕組み	日本のふるさとことばを集成
基本的な道筋	地方に独特
喉頭の全体	三者が凡退
音響的な特徴	新旧が交代

後部の歯茎	商法に違反
硬口蓋よりの歯茎	英語話者と同然
曲線の全体	日本の沿岸
音声研究に入門	日本の近海

一方、複合語の場合はこのような省略がないと考える。たとえば下の例で助詞「の」を入れないときと入れたときでは、表される意味が異なるのである。

北海道大学 ≠ 北海道の大学

これに関連し、窪園（1998）には興味深い複合語が提示されている。

首位争い	行方不明
首位攻防	消息不明

上のものは複合語であるが下のものは音韻的な一語化が起こっていない句である。

さらにおもしろい現象を示すのが「先生」という呼称である。

山下	+	先生	→	山下先生
やま ₁ した		せんせ ₁ い		やま ₁ したせんせい
				やましたせんせ ₁ い
			*	やましたせ ₁ んせい

紀香	+	先生	→	紀香先生
の ₁ りか		せんせ ₁ い		の ₁ りかせんせい
				のりかせんせ ₁ い
			*	のりかせ ₁ んせい

呼称の場合、前部要素となる人名のもともあるアクセント核を保持するはずなのだが、最近では平板化して発音する人がふえている。つまり一語化が見られるのだが、一般的な複合語規則には従っていないのである。

別の呼称「教授」は「先生」とは異なった振る舞いを示す。

山下 + 教授 → 山下教授
やま¹した きょうじゆ やま¹したきょうじゆ
* やましたきょうじゆ
* やましたきよ¹うじゆ
(cf. 悪徳教授 あくとくきよ¹うじゆ)

後部要素が3～4拍の複合語は最もよく見られるものである。本節で述べた構成上の例外と、音韻上の例外があるとしても、冒頭で提示したアクセント規則は有用であると考ええる。次に後部要素が1～2拍のものを考察する。

3.3 複合語の後部要素が1～2拍の場合

後部要素の持つ特性により、以下の三つのケースに分類出来る

- A) アクセント核が消える。
- B) アクセント核が、複合語の最後から2番目の拍に付与される。
- C) アクセント核が、複合語の最後から3番目の拍に付与される。

- A) のケースに当てはまるのは
～語 (例外: 主語)、～的、～色、～課、～教 (例外: 仏教)、～化
- B) のケースに当てはまるのは
～千、～機、～万、～時 (じ)、～部、～主義
- C) のケースに当てはまるのは
～億、～枚 (例外: 五枚)、～力 (りょく)、～人 (じん) (例外: 日本人)
～族 (ぞく)、～会 (例外: 飲み会)、～省、～班

などである。ただし、アクセント核が付与される拍が特殊拍 (撥音、長音、時に二重母音の後部) である場合には、一つ前の拍に移動する。

複合語の後部要素が1～2拍というのは、日本語教育の早い時期から登場する。教師が積極的にこれらの規則を教えることで、学習者のアクセントに関する理解と感覚が向上するのではないだろうか。

4. おわりに

以上、複合語アクセントについて考察してきたが、これらの規則は整理すればそれほど複雑ではないと思われる。ある意味では単純語のアクセントを規則を教えるより、服午後のアクセントシフトを教えるほうが「生産性」は高い。学習者の習得語彙数が増えれば増えるほど、その有用性が増す。

日本語教育に於いてアクセントの教育は不可欠である。この研究ノートが日本語教育の現場で活用されることを願っている。

参考文献：

- 窪園晴夫（1995）『語形成と音韻構造』くろしお出版
- 窪園晴夫・伊藤順子（1997）「音韻構造から見た語と句の境界：複合名詞のアクセントの分析」、音声文法研究会編『文法と音声』pp.147-166
くろしお出版
- 窪園晴夫・田中真一（1999）『日本語の発音教室、理論と練習』くろしお出版
- 窪園晴夫（2002）『新語はこうして作られる』岩波書店
- 窪園晴夫（2004）「音韻構造から見た単純語と合成語の境界」、音声文法研究会編『文法と音声IV』pp.123-143 くろしお出版

やました よしたか（留学生センター助教授）